

2007年SD国際大会

国際担当理事 高橋 裕
専修大学 商学部

概要

- 参加者数 554名
 - 米国 279名(過半数・但し、中韓の留学生多数)
 - 日本 5名
 - 中国 8名
 - 韓国 5名
- 参加国数 50カ国
- Seaport Hotel Boston
 - 一昨年と同じ場所

日本からは
発表者一名、
中韓からは
多くが発表者、
また、米国経由の
留学生などを
入れると中韓は
30名程になる



研究発表

- 例年と同じ構成
 - Plenary
 - Parallel
 - Poster
- 「過去を振り返って」的講演やディスカッションも
- ポスターは1コマで全140件が一箇所で行われた(除:支部ポスター)

Plenary Sessions 1/2

- Cyclical behaviour in electricity markets (S. Arango & E. Moxnes)
 - 北欧の電気料金高騰の16年サイクルを生み出すシステムをモデル化
- Using sysmtem dynamics to analyse policy options for tobacco control in NZ (R. Cavana & M. Tobias)
 - NZにおける国家レベルのタバコ消費量コントロールを行うために使うモデルの紹介

Plenary Session 3/4

- A hybrid approach to creation of dynamic risk management models (N. Dulac et al.)
 - STAMPモデル(リスク評価)をモデリングに持ち込む方法と、NASAでの実践例
- System Dynamics --- the next 50 years (J. Forrester)
 - SDの教育課程での更なる標準化と普及について

Plenary Session 5/6

- System Dynamics applied to project management: a survey, assessment, and directions for future research (J. Lyneis)
 - プロジェクト管理の成功例を集めて、Project Dynamicsとしてまとめている
- Four decades and five careers in SD (D. Meadows)
 - 自身の体験をもとに、SDの利用方法が立場によって変わっていくことを示唆

Plenary Session 7/8

- Why myopic policies persist? Impact of growth opportunities and competition (H. Rahmandad)
 - 組織が長期的視野に立てない構造的な理由を、心理学や学習プロセス観察に依拠せずに説明を試みている
- The emergence of limit to growth scenario 2: pollution crisis(J. Randers)
 - 地球の現状が「成長の限界」のシナリオのうちのひとつと酷似している事を詳細に指摘している

Forrester Award

- 受賞者 Lane, David C.; Husemann, E.
- 受賞論文 'Steering Away from Scylla, Falling into Charybdis: The Importance of Recognising, Simulating and Challenging Reinforcing Loops in Social Systems.'
- 掲載誌 Entscheiden in komplexen Systemen. Edited by Milling, P. Duncker and Humblot, 2002, pp. 27-68.

- 正のフィードバックループを
 - 知る
 - 飼い慣らす
- そのために
 - 構造に注意
 - マルチエージェントシミュレーション的発想・計算を積極的に取り入れることを提言



その他のイベント

- Talent Show
 - SDIに關係する(かも知れない)詩・音楽の披露
- Diagram Slam
 - 1週間以内の雑誌・新聞記事から因果図やパイプライン図を作成
 - 正確さ
 - 面白さ
- Silent Auction
 - 一般会員・賛助会員から出品
 - 多くは書籍やソフトウェア

理事会

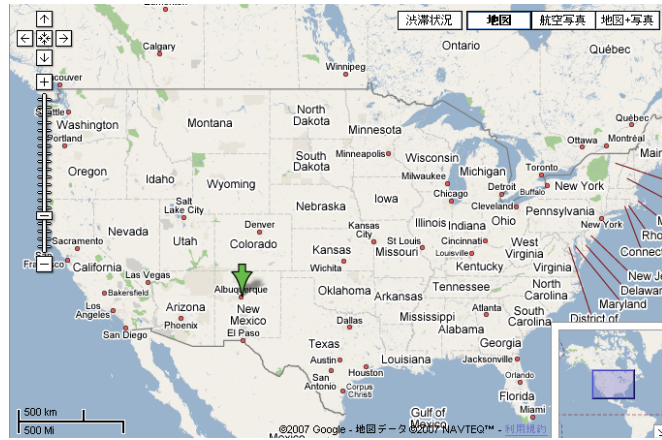
- 収入に応じて会費金額を変える方向で検討
- 高収入会員は
- 「次の50年」プロジェクト
 - 学会の次の50年間の発展のための方向探し
 - H. Akkerman, J. Rahn, D. Cambella & 高橋
- 2008年大会 ギリシャ アテネ
- 2009年大会 アメリカ アルバカーキ
- 2010年大会 アジア

2008 Athens (次回)

- ギリシャ アテネ
- 会期: 2008年7月20日(日)～24日(木)
- 場所: Athenaeum InterContinental Hotel
- 投稿〆切: 2008年3月21日(金)
- (ここ数年と同じく)完成原稿で投稿・審査



2009 Albuquerque



2010 アジアのどこか

本部でもさまざまな意見

- 合同組織委員会型
 - 各国の事情・価値観の違いは？
- 単一国主導型
 - 最終的な場所決定は本部によるべき。
- マルチサイト型
 - 「ポスターはこの国、パラレルはこの国」で納得できるのか？超コスト高ではないか？

アジアの国々

- 中国
 - 上海か蘇州が候補
 - インフラは整いつつある(万博と五輪)
 - アジアパシフィック大会の経験
- 韓国
 - 2年前から準備
 - スポンサーもついている
 - 現地参加者200名以上・英会話OK
- 日本
 - 同志社大学をホスト、京都をサイトとして

その他、本部で確認したこと

- 「支部」が主催する必要はない
 - これまでの大会も、多くは支部主催ではない
- 開催地支部会員は発表・聴講はすべき
 - アジアでは参加者が激減する可能性あり
 - 大会収入の点で、現地参加者確保は重要
- エクスカーションは特に必要ない

支部活動連絡会

- 会員構成
 - 多くの支部は大学研究者・企業オーナーと院生が多い
 - 本部での支部登録が入会となる例多い
- 役員構成
 - 「支部長=Liaison」が多い
 - ほとんどは支部長、会計、事務の3名体制
 - 上記+前支部長+次期支部長の5名体制も
 - 日本はやや役員数対会員数比率が高い
- 支部会費の有無
 - 基本的に無料で「必要経費を必要時に徴収」という例も
- 機能
 - 支部としての機能と国内学会としての機能を分離するところも

ISSS 東京

- International Conference of International Systems Science Society
- 東京工業大学
- 学会自体は大規模
- しかし参加者はとても少ない(150名程度)
 - 全体セッションでも40名ほどしか出席しない
- 東工大の院生の発表が多い
- SDの有名人も招待講演で出演(D. Lane氏など)

2008 (次回)

- ギリシャ アテネ
- 会期: 2008年7月20日(日)~24日(木)
- 場所: Athenaeum InterContinental Hotel
- 投稿〆切: 2008年3月21日(金)
- (ここ数年と同じく)完成原稿で投稿・審査



2007 上海

- 2007 Multi-Conference on the applications of Systems Science, Management Science and System Dynamics
- The Studies of Sustainable Development and Complex Systems
- 10月19日(金)~21日(土)
- 同済大学 Tongji University
- 参加費 \$300(USD。会場で現金払い)
- 問合せ systemdynamics@126.com